

絵師俊明は関西にいたか

五十嵐俊明(一七〇〇〜八一)は江戸中期の絵師です。新潟に生まれ、三十歳のとき江戸で絵を学んだ後、京都で絵師の位「法眼」を授かり延享元(一七四四)年に四十五歳で帰郷しました。新潟に居を構え多くの後進を育てた俊明ですが、帰郷後の作品が関西に現存するほか、関西で出版された絵師番付にも名が挙がっています。仲介者がいたのか、俊明自身はるはるはる関西まで赴いたのでしょうか。

京都相国寺の禅僧大典(一七一九〜一八〇二)の漢詩集『小雲樓稿』に、「俊明」が登場するのを発見しました。大典は、京都の絵師伊藤若冲のパトロンとしても知られ、漢詩作りが大好きな文化人でもあります。そんな彼はしばしば大坂の「混沌社」という漢詩創作グループに入り浸るのですが、ある大坂滞在時、混沌社メンバーの「俊明」が訪ねてきたので漢詩を作って贈ったといい、その詩が本書に収められました。この「俊明」が、新潟の五十嵐俊明である可能性が高いのです。

混沌社の中心である片山北海(一七二三〜九〇)は、新潟出身で俊明没後の翌年にその墓誌銘を作文した人物。この銘文は現在俊明の伝記のもととなっています。北海は京都へ出て元文五(一七四〇)年

に儒学者の宇野明霞に弟子入りしますが、俊明も明霞とは交友がありました。明霞没後に編集された『明霞先生遺稿』には帰郷する俊明へ贈った詩が掲載されています。そして、これを編集したのは大典です。大典もまた、北海とともに明霞に儒学を学んでおり、二人は兄弟弟子でした。延享二(一七四五)年に明霞が没すると、北海は支援者の招きで大坂へ移り、やがて大坂の文化人たちに慕われて混沌社の中心的存在になりました。大典、北海、俊明は旧知の仲だったといえます。五十嵐俊明以外に妥当な「俊明」は、当時の大坂・京都の人名録には見当たりません。

さて、『小雲樓稿』では大典の作詩が詩の形式ごとにまとめられ、それぞれ年代順に並べられているようです。俊明への詩の前後を確認すると、それが明和二(一七六五)年に詠まれたことがわかりました。俊明が明和二年に大坂にいたことになりました。それは、面白いことにいくつかの事実と関連してきます。

一つは、絵師番付『古今丹青競』に「明和 呉俊明」と記載され、活躍期が明和とされていること(「呉」は六十代に俊明が名乗った姓です)。もう一つは、当館所蔵の画稿(「下絵」

「孔明図」「張飛図」に、明和二年(俊明十六歳)に「松前侯」の求めに応じて描いたと記されていることです。京都では松前藩の分家筋にあたる松前順広が、一七五六〜六四年に西町奉行を務めていました。彼を介して、関西に滞在していた俊明に絵が注文された可能性が出てきました。

明和二年には、俊明は関西に滞在して仕事を受注し名を高めていたと考えられます。また同時に、絵師としてだけでなく、漢詩をたしなむ文化人としての付き合いもありました。そのネットワークがさらなる仕事の縁となったかもしれません。

しかし、俊明はあくまで新潟を拠点としていました。作品の落款に使用さ

れた印章には「越人」と刻まれたものがあり、「越人」・「俊明」の組み合わせが作品の中でもっとも多く見られます。

藩などのお抱え絵師となることなく、自らの力で文化の中心地である関西へ挑み、その地の文化人たちと対等に交流した俊明。いまだ謎も多く、魅力の尽きない新潟の絵師です。

(なかむらさとな 学芸員)



画稿「張飛図」(部分) 五十嵐俊明 明和2(1765)年 当館蔵

古町

私は、就学直前に脳膜炎になりかけたとかで、小学三年くらいまでの記憶がありません。そんな私の幼稚園のあいまいな記憶に古町通の茶の香りがあります。古町十字路のバス停で降りて、古町通を通って幼稚園に通っていたらしいのです。多分、浅川園の茶の香りだったのでしょう。

その後、小・中は山ノ下からほぼ出なかったのですが、母と満蒙寿司で生ちらし寿司を食べた記憶があります。いなりやかんぴょう巻以外の寿司は初めてだったのかもしれない。高校の時、喫茶店にも映画館にも入ることなく、学校と家を往復するだけでした。

大学は五十嵐で、三年の時は週一度教育学部の講義を受けに西大畑に来ました。昼食に友と食べた東華楼本店の野菜炒め定食と三日月のソフトクリームがおいしかったと記憶しています。五十嵐には学科の新歓コンパをする会場はなく、古町通の清水フーの二階で行うのが恒例でした。後輩がピンクレディーを踊ったの

を覚えています。どうも私の古町の記憶は飲み食いからみです。

今年文化庁の博物館クラスター形成支援事業を受託し、「新潟古町の記憶と魅力発信事業」が始まっています。その一つが「昭和の古町を掘りおこしてみよう」です。かつての地図や写真をみたり、町を歩いたりして、各々が古町の姿を思い出し、当時の暮らしのなかで、古町をどのように楽しんだのか整理しようという企画です。多くの人の記憶と想いを重ねることで、かつての町の魅力を明らかにし、今、古町に必要な魅力を探ることが目標です。

博物館も市民とともにまちづくりを参画することが求められる時代となっています。



多くの参加者が盛況だった7月15日のキックオフ講演会

収蔵資料紹介

佐渡汽船商事 津野務著 『一九六六』観光にいがた』

今年度、当館を事務局とし、文化庁博物館クラスター形成支援事業「新潟古町の記憶と魅力発信事業」を実施しています。企画のひとつに、古町がにぎわいを見せていた昭和三十年代以降の記憶と出来事を市民とともにたどる「昭和の古町を掘りおこしてみよう」を担当していることから、当時のみどころ、名店を紹介した観光パンフレットなどの資料を調べています。本資料は、昭和四十一(一九六六)年に発行されたもので、古町通をはじめとする中心市街地のお店を著者独自の目線で紹介しています。

「古町みである記」の頁では、古町通一番町から北に向かって通りを歩

き、表通りや裏手にある店を紹介するといった体で書かれており、現在も営業をしている洋食の老舗「キリン」(一番町)を手始めに、市内百貨店の草分けという「芳屋」(四番町)、レーシング・カーサーキットがあったという丸和会館(四番町)、榎谷小路に面し、待ち合わせスポットであった書店・北光社(六番町)など当時を知る人ならば懐かしく思い起こす名前が列挙されています。

本資料は、繁華街、歓楽街であった往年の中心市街地を明るい文面で教えてくれるガイドブックです。当館情報ライブラリーにて閲覧できます。

(渡邊久美子 学芸員)



観光にいがた

『観光にいがた』表紙